

タミル人と日本人

陽光新聞社・顧問
塩澤宏宣

私事で恐縮ですが、大腸がんが見つかり、去る9月18日に手術しました。幸いにして早期発見でしたので、術後10日で退院できました。皆様にも検診をお勧めします。というわけで、今月のテーマはベッドで考えたことです。

今から25年前、定年退職後、以前から考えていた「日本人のルーツ」を学ぼうと考えました。

といっても、あまり学術的なものではなく、ごく趣味的な範囲ですが。そこでまず、図書館通いをはじめました。最初に目に付いたのが大野

晋氏^注の「日本語の起源(岩波新書)」でした。

大野晋氏は、「日本とは何か」を解くために古代日本語の研究をはじめ、そこで行き着いたのが、南インドのタミル地方と古代日本の関係とのこと。内容をかいつまんで記します。



紀元前500年ごろ、水田耕作・金属の使用・機織という文明複合が一挙に北九州から始まった。そこから弥生時代がスタート。長い間、狩猟・採集・漁労を主体として生活してきた縄文時代に突然現れた水田耕作は、朝鮮あるいは、中国の江南から渡来したとされるが、言語学者の大野氏によれば、タミルからきたという考えにいたる。その理由は2つある。

まず、最古のタミル語(BC200～AD200)と最古の日本語(AD700)とを比較すると、この2つの言語には種々の対応が見出せる。

1. 約500語の語根がきちんとした対応がある。
2. 文法が共に膠着語である。助詞・助動詞が名

詞・動詞の後にくる。20語の助詞・助動詞の対応がある。

3. ゾ・カ・ヤの係り結びを共有する。
4. 五七五七七五七五七…の長歌形式、五七五七七の短歌形式を共有している。
5. タミル語は子音終わりの音節があるが、日本語はすべて母音終わり。縄文時代の日本語が母音終わりであったものを受け継いだと思われる。現代日本語の基礎はこの時に確立され、以降それが伝承されてきたことが分かる。

次に、約500の対応語の中に文明に関する単語が含まれている。

▲農耕…アゼ(畔)、ウネ(畦)、タンボ(田んぼ)、ハタ(畑)

▲農作物…アハ(粟)、カユ(粥)、コメ(米)、ナヘ(苗)、ヌカ(糠)、ヒネ(古米)、モチ(餅)、ワセ(早稲)、ワラ(藁)

▲金属…カネ(金)、タカラ(宝)

▲機織…アゼ(綜)、ウム(績)、オル(織る)、カセ(栳)、ハタ(布・旗・凧)

縄文時代には、これらの「モノ」自体がなかった。それが弥生時代に一斉に出現した。その「モノ」の名がタミル語と日本語と同じであることは、これらの事物がタミル語圏からもたらされたことを示すと思われる。

タミルと日本の関係を考える上で、こうした「モノ」に関する単語が一致するだけではない。日本人の精神生活に関する単語にも対応が見出せる。カミ(神)、マツル(祭る)、ハラフ(祓う)、イツ(稜威)、イミ(忌み)、ウヤマフ(敬う)、アガム(崇む)、コフ(乞う)、ツミ(罪)、ノム(祈む)、ハカ(墓)、ヒ(霊力)、モノ(怨霊)など。日本古来の宗教意識にかかわる単語の大部分が含まれる。

日本の古代の「カミ」の特質は次のようなものであった。

1. たくさんいた。八百万のカミ

2. 本来、どこにいるか分からない、見えない、姿のない存在
3. 食物をマツリ(祭り)、祈願すると、その場所に来臨して人間に幸せを与えると信じられていた。
4. カミの怒りに触れると、カミは人間に死を与えた。
5. カミは「雷」や「山」を意味することもあった。
6. カミは高天原にもいて、それは山などに降下し、峠などを占有していた。人間は通行に当たって幣(ぬさ)を供えて通行の許可をもらった。
7. カミは「古事記」や「日本書紀」で人間化され、男神(イザナギ)・女神(イザナミ)のように結婚して島々を生んだ。
8. カミは一定の地域を支配する力を持った。
9. 「古事記」などに「悪神(アラブルカミ)」が登場するが、すべて天皇家に反逆する地方領主を指している。カミは領主、つまり地方の土地の支配者でもあった。

タミル語に「カミ」の対応語がある。それは超能力を有し、かつ、支配者でもあった。カミは姿を見せず、降下する場所を設けて酒食を供えると、来臨して人間に幸福を与えるという。また人間は吉事を願ったり、悪事の償いをするにはハラヘ(祓い)をする。モノ(怨霊)を恐れ、それにモノを供えて宥めようとする。タミルからは文字の輸入はなかった。タミル文字がタミルの地で広まる前に、両国の関係は切れたものと考えられる。



私たちは、日本文化のルーツは中国と朝鮮にあると教えられてきました。地図上の位置から考えれば、それはごく自然だと考えてきました。しかし、日本列島にはポリネシアから黒潮が流れてきます。あながちタミルから文化が流れてきても不自然ではないと感じました。一種のロマンを感じ

たしだいです。大野氏のこの学説に対しては、否定する学者が多く、大野氏もあえて反論はしていません。

ここでロマンついでに、タミルについて触れてみたいと思います。タミル人は南インドからスリランカにいたる地方に多く住むヒンドゥ教徒です。旧セイロンが英国から独立する時、シンハラ人(74%：仏教徒)とタミル人(18%)が争いました。長期間の内戦で死者も多数に上りました。タミル語はインドをはじめ、スリランカ・シンガポール・マレーシアで使用されています。

世界地図を広げてみれば、南インドやスリランカから日本は相当長旅だったと思います。遠い昔、丸木舟に乗ってインド洋を渡り、太平洋の黒潮に乗って日本にたどり着く…。ロマンなくしては語り明かせないと思います。外国人に言わせると、日本人ほど歴史に関心を寄せる国民はいないといえます。たしかに私もそう感じています。というのも、日本は1万数千年前の縄文時代からの遺跡はあるからではないでしょうか。さらに科学の領域まで取り込んだ実証主義的歴史学が、理屈っぽい日本人にはいっそう受け入れやすくなっていると思います。

今回取り上げた「タミル人と日本人」は、その点では幾分劣っているようですが、すべての文化のルーツが「中国・朝鮮から」渡来したという考えに納得できない人々にとっては興味ある話題ではないでしょうか。

■注

大野 晋(おおのすすむ)：1919～2008年。東京帝国大学文学部国文学科卒国語学者。文学博士。学習院大学名誉教授。

古代日本語の音韻、表記、語彙、文法、日本語の起源、日本人の思考様式など幅広い業績を残した。主著は『日本語の起源』『日本語の文法を考える』『日本語の形成』『日本語練習帳』など。
(ウィキペディアより)